

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第三部

第十九章

Long-term calendar

峯村 明

リ・コンストラクション

[登場人物](#)

[19・Long-term calendar](#)

[202.](#)

[203.](#)

[204.](#)

[205.](#)

[206.](#)

[207.](#)

[あとがき](#)

[奥付](#)

登場人物

桧山 健	27歳の実業家
A. V. ラウレンスⅢ	H&L財団代表
アランデル・アウレア	ポルタアウレア公国の大公
エドミール	〃 皇太子
マックス・ペイリー	古生物学者 超古代文明同好会会員

19・Long-term calendar

202.

「――父上、お疲れになったのではありませんか？ 少し休まれては？」

「それもそうだ。諸君も休憩が欲しかろう」

息子に促されて席を立とうとするアランデルを健は呼び止めた。「お尋ねしたいのですが」、と。

「うむ？」

「黄金門の皇帝陛下にお尋ねしたいのです。陛下はアンベレオ・カレンダーというのをご存知でしょうか」

「はて。聞いたことがあるようなないような。なんとなれば私は政治的存在。カレンダーの如き科学的分野は、メッサナ化学者集団あるいはそなたら評議会の科学部門の管轄では？」

健とラウレンス氏は揃って、うっとなった。たしかにそうだった。アランデルは二人が言葉に詰まるのを面白そうに見やって言った。

「で、そのアンベレオ・カレンダーとやらがどうしたと？」

「マヤ・アステカカレンダーの原形なのだそうです。そのカレンダーによると、太陽暦、神聖暦、金星の会合周期、大熊座流星群の周期、四つのすべてが37960日という日数で一巡し、始まりの日が一致するのだとか。

アンベレオが滅びたあの日、四つのカレンダーは一巡していた。新しい周期に入ろうという日だった。

そして今からおよそ百年前、太陽暦にして20,800年、つまり、7,592,000日が経った。37,960がちょうど200回カウントされたのです――」

健は昨夜のイリチャのセリフをほぼそのまま繰り返した。アランデルの目がふと陰くなる。

「百年前に？ 二百回とな？ 百年前に――」

「その時、何かのスイッチが入った」とイリチヤは言った。何かとは数字による世界支配に違いがない。桧山正太郎はその区切りに居合わせ、スイッチが入るのをその目で見たのだ。

アランデルは喘ぎ、胸を手で押さえた。侍従が驚いて駆け寄った。そういえばアランデルは心臓疾患を抱えていたのだった。

203.

大公閣下をエドミールと侍従に任せ、客間には健とラウレンス氏のふたりが残った。

健は言った。「六年前、オレもダラスに行ったんですよ、真夏にね」

ラウレンス氏は、えっと驚き、「真夏、そう、私も真夏でした！ とても暑かった！ 旅行ですか？」

健はあいまいに笑った。あなたを追いかけて行ったんだとは、なんだか気恥ずかしくて言えなかった。

「友人に会うためです。そう、ダラスと言う地名を聞いて、思い出しました。昨夜から何か引っかかってたんだ。彼に会いに行かなければ」

そしてやおら立ち上がる。

「え？ まさかこれから？ どこへ？」

健は壁に掛けられている世界地図を指さした。デザイン化された世界地図といおうか、真ん中はポルタアウレアで、その周囲に広がる世界が一望できる。シンプルな額縁に入っていて、客間のクラシックモダンな雰囲気とうまい具合にマッチしていた。もしかしたら皇太子殿下の作かもしれない。

健が指したのはポルタアウレアの真東。ゴビ砂漠のあたりだ。

「ちょっと行ってきます。なに、すぐ戻りますから」

「え。ちょっと。ケン！！」

父親の私室から廊下へ出てきたエドミールは、廊下の窓の外になにか白いものが動くのを感じて足を止めた。白いものは――翼竜ではないか！！

彼は泡を食って廊下を走った。翼竜はサンルームから外へ開かれたテラスの向こうにホバリングしていてエドミールが到着する前に飛び立ってしまった。

「ラウレンスせんせい～」

翼竜に手を振って見送っている人物に恨みがましく詰め寄る。

「彼はいつ来たんです！？　ひとこと言ってくださいよ～！！」

「いや……彼はずっといましたよ。テーブルの裏に貼りついてました。気がつかなかったんですか？」

「テーブルの裏って……！　やつはヤモリですか！？」

ラウレンス氏は声をたてて笑った。「ま、似たようなもんですね」

204.

「ふーん？」、とマックス・ペイリーはじろじろと翼竜を眺めてから言った。

「ケツァルコアトルス型のグライダーか？　所帯持ちの金持ちがまた妙なモノを買いこんだな。なんの嫌がらせだ？」

「なんだ、機嫌がわるいなあ、せっかく会いに來たのに。ほら、飲み物と食べ物」

「お。サンキュー」

古生物学者ペイリーとは大学時代からの長い、気の置けない付き合いである。大学も専攻分野もそれぞれ違うが、彼らは『超古代文明同好会』の会員なのであった。

「しかし、コレを作ったやつはケツァルコアトルスというものを理解しとらんな。"ケツァ"は体の軽量化のために頭蓋骨に空洞を持ってるくらいだ。つまり羽で覆われたりしているわけがない。羽の分、重くなるじゃないか」

ペイリーはケツァルコアトルスが好きすぎて古生物学者になってしまったクチである。"ケツァ"に関しては骨の隅々まで熟知していると自負している。

「ほんとは"ケツァ"じゃなく、Quetzalcoatlusの頭文字の"Q"を、古代ギリシャ語読みでコッパと呼びたいんだが、なんでも著作権保持者がうるさくて、つかえないんだそうだ」

「そうなのか？ 直接交渉してみたら？」

「いい。どうせめんどくさいやつに決まってる¹。ところでユーは何しにゴビ砂漠へ？ 借金取りかはたまた嫌がらせか？」

「おっと、空の旅が快適で忘れるところだった。ペイリー、おまえ以前、こんなこと言ってなかったっけ、生物の大量絶滅には周期性があるとか」

「おお。たしかに」

「それ、詳しく聴かせてくれないか」

「……借金いくらか差っ引いてくれるなら」

「ことによっては帳消しにしてやる」

それを聴いたとたん、ペイリーの脱水した体と気力と目に精気が宿った。

205.

「よーし、説明してやるから心して聴くんだぞ。」

原生代、古生代、中生代、新生代っていう時代区分は知ってるよな、まあ、聞いたことはあるだろ。

それをさらに分ける。

古生代古い順にカンブリア紀、オルドビス紀、シルル紀、デボン紀、石炭紀、ペルム紀。

中生代に入って三畳紀、ジュラ紀、白亜紀。

そして新生代、古第三紀。

じゃあ、どういう根拠で分けられているのかというと——大量絶滅により従来の動物の多くが絶滅し、新たな動物が発生したことに因るんだ。大量の動物がいなくなった後の空白に、新しい動物が現れたんだな。

その1・オルドビス紀とシルル紀の境(O-S境界)の頃、約4億4400万年前。

地球生物種の約85%が絶滅した。被害に遭ったのは主に三葉虫とか棘皮動物(きょくひどうぶつ)、ヒトデの仲間だ。原因は超新星が爆発して地球がガンマ線に襲われたとか、火山爆発で日光が遮断され寒冷化したからだとか言われてる。顕生代最初の大規模な大量絶滅だ。

¹ そんなことはないと思います

その2・デボン紀後期のフラスニアン期とファメニアン期の境(F-F境界)で、約3億7000万年前。地球生物種の約82%が絶滅。硬骨魚類、板皮魚類など海洋生物がいなくなった。この頃二度寒冷化してるのと、海洋の酸素、二酸化炭素も減ってる。

その3・ペルム紀と三畳紀の境(P-T境界)にて約2億5000万年前、地球生物種の約96%、ほぼすべて絶滅。海洋生物が主で、三葉虫が完全に全滅した。地球規模で大規模な火山活動があった。おそらくその温室効果で酸素の濃度がさがった。

その4・三畳紀とジュラ紀の境(T-J境界)約1億9960万年前、地球生物種の約76%が絶滅。アンモナイトが死滅し、小型の肉食動物や大型の両生類が被害に遭った。火山活動説、隕石の衝突説なんかがある。これ以降、当時はまだ小型だった恐竜が台頭する時代になる。

その5・白亜紀と古第三紀の境(K-Pg境界)約6550万年前、おなじみのやつだな。大型爬虫類、首長竜など恐竜のほとんどがやられ、地球生物種の約70%が絶滅した。ユカタン半島に小惑星が衝突したからだという。恐竜がいなくなった後は哺乳類の天下になった。

この五つを大量絶滅ビッグファイブというんだが、このほかにも若干規模の小さい絶滅は幾度か起きている。

じつは、『その1』より前、カンブリア紀とその前の原生代の境でも...V-C境界ってんだが...大量絶滅があったことが最近わかってきた。だいたい五億年よりも前だ。するとだな.....ほぼ2700万年の周期で絶滅期が繰り返されてるらしい。俺の言った『周期性』というのはそのことだ」

ペイリーは一気にしゃべってから口をつぐみ、遠い目でどこかを眺め、ケツアルコアトルス型のグライダーに目を遣った。グライダーはうずくまって熱心にペイリーの話に耳を傾けていた。

そしていきなり言った。
「ヒヤマ、おまえ、マヤのロングカウントって、知ってる？」

「——は？」

「いや、すまんすまん。『超古代文明同好会』会員なら知ってて当然だったな。しかし読者のためにちょっと説明しておこう。

マヤの暦には、カレンダーラウンドとロングカウント、ほかに何種類かある。

カレンダーラウンドは、1年が365日の太陽暦と、1年が260日の神聖暦とを組み合わせただ。

ロングカウントは、紀元前3114年8月11日を基準にして、そこからどれくらい年月が経過したかを表したもので、長期暦ともいう。

また、カレンダーラウンド(太陽暦+神聖暦)+ロングカウント+月の情報+夜の九王、なんてもある。どういう使い方をしたんだかな。

そもそも、カレンダーラウンドもロングカウントも、わからないことが多すぎる。コンキスタドールが資料を片端から燃やしちまったってのも一因だろうが、そもそも、マヤ人自身が知らなかったんじゃないかと思われるフシがあるんだ。

たとえば、なぜ365日と260日とを組み合わせたのか。ふたつの数字の最小公倍数は18,980日。年にして52だ。52年でふたつの暦が一巡して元に戻る。52年周期の最終日には特別な意味があったみたいで盛大な儀式が行われたが、なんで52年なんだ？ これはマヤ文明どころかもっと古い、600年も遡るオルメカの時代にすでに使われてたんだ。呼び方も不明だ。ツオルキン暦とか日歴とかって呼ばれてるが、元は何だったのかわからない。

ロングカウントの基準になってる紀元前3114年8月11日はマヤ創造の日だっていうんだが、ホンマかいな。なんでそんな細かいんだ？ なんの日付なんだ？ これも謎だ。

まだあるぞ。13世紀ごろ作られたドレスデン・コデックス²には月や火星、金星の天体観測の表がある。こういうのはほかになかった。

ところが最近、グアテマラのシュルトウンの遺跡で天体観測とマヤの暦とを計算した壁画が見つかった。シュルトウンは5世紀から9世紀の古代都市だ。ドレスデンより500年から800年は古いことになる。壁画の象形文字には365日周期の太陽暦のほか、584日周期の金星暦、780日周期の火星暦とみられるものも、さらには7000年先の日付まであった。残念なことに、この遺跡はかなり荒らされ盗掘されていた。

あと、819暦というのがある。これは水星、金星、火星、木星、土星それぞれの会合周期と関係あるらしい。13例しか発見されてなくて、何十年も学者を悩ませてる。

古代、メソアメリカで暦に携わってた人々は熱心な天文学者で、空のあらゆるものを記録してた。天体の動きで神々の意志と行動が読めると信じてた。まあ、学者というよりは、占星術師と言った方がいいか。

ロングカウントの単位は二十進法で、象形文字によってどんな数字もコンパクトに表現できる。シュルトウンの壁画には7000年先の日付があるって話したけど、それだけでもびっくりだが、別の遺跡にはアラウトウンという単位を使った日付の表示がある。なんと、230億日、6300万年だぜ。これはもう、地質学的年月だ！

² ドレスデン・コデックスは10章に分けられる。

01・序。神々の衣装、フン・アハウへの犠牲、神々への祈願と神託の準備。

02・月神イシュ・チェルの暦。イシュ・チェルは癒しの神であり、また病気をもたらす。

03・金星表。金星神の図像と情報。584日の金星の会合周期を使い、312年にわたって金星の明けの明星または宵の明星としての現れ方を記す。金星は攻撃的な神と考えられており、おそらく軍事行動の成否を計算するために用いられた。

04・日食と月食の表。マヤ人は食を不吉で危険なものと考え、祭儀や犠牲によってその影響を避けようとした。

05・78の乗算表。78という数にどのような意味があったかは不明である。

06・カトウンの予言。カトウンの終わりに起きる災害について。マヤ暦においてカトウンは約20年の周期で、13カトウン(256年あまり)で一周する。周期の終わりは飢饉・旱魃・地震のような災害と結びつけられていた。4つの空白のページを含む絵文書の裏面の最初の部分である。

07・蛇の数字と世界の柱。蛇の数字は約3万年間に起きる神秘的な出来事を示す。その後には世界の柱について、および雨の神であるチャクのさまざまな現れについて記す。マヤにおいて時間の起源は雨の起源と結びついていた。ここでは古典期マヤのパレンケやティカル の碑文と同じ用語が用いられている。

08・大洪水。洪水による宇宙的災害を描写している。マヤの伝統に従い、現在の世界の滅亡は、過去に存在した3つの世界の滅亡によって予言されている。

09・新年の祭り。ハアブの最後の5日に王と神官が行う祭儀について記す。新年の祭りは破壊された世界の象徴的な再創造と考えられていた。

10・農業の予言暦。雨の神と火星の運行。予言暦は天候や収穫について述べる。42-45ページは雨の神の旅と、780日の周期をもつ火星の動きを記す短い節である。最後のページの最後の部分には91の乗算表があるが、この数字の意味は不明である。

マヤの暦はたぶんマヤ人が発明したものじゃなくて、先行した高度な文明から引き継いだものだと俺はこっそり考えてる。大っぴらに口にすると学者としての息の根を止められる考えだから、内緒だぞ。

それを置いといても、マヤの数学、暦、天文学はとてつもなく優秀で正確だ。そんな人々が6300万年なんていう地質学的数字を残したのはどういうわけだ。むろん、何かを観測し、計算した結果なんだ。それは——なんだろう——

先行文明から完全な形で引き継いだんじゃないかもしれん。断片、不完全な知識、知られていない暦。たぶん、6300万年云々はそういうのに属する。

ヒヤマ、おまえ俺に何を聞きに来たって言った？ 生物の大量絶滅だったよな。

大量絶滅を経て新しい生き物の世界が生まれる、旧世界が滅び、すべての古いものが排除され、新世界が形成される。

それって、古い世代から生まれた双子の若者がかつての王国の王たちを一掃する冒険を語った『ポポル・ヴフ』の世界そのものじゃないか。

その周期性だ。

もう、勘なんだが、マヤは天体の動きから生物の大量絶滅を予測できたんじゃないかと思うんだ。おそろしく長い周期で巡ってくる天体、彗星だな、彗星なら何百、何千、何万年かかろうと間違わずに戻ってくるはずだ、それが周期的に地球に干渉して、自然も生き物も根こそぎ変えてしまうんだ。

返す返すも、「盗掘者のばかやろーコンキスタドルのおおばかやろー！！」

マックス・ペイリーは誰もいない砂漠の空の上で、夕日に向かって怒鳴った。メソアメリカの古代史もマヤ暦も、古生物学者のペイリーにはまったく門外なのだが、超古代文明同好会会員の血が黙ってはいられない。そしてアカデミックな学者と超古代文明同好の立場はまったく相容れないどころか、前者の立場をきわめて危うくする、もとい、命取りになりかねないものなのであった。

それは王さまにはロバの耳が生えているという決して口外できない重大な秘密を知ってしまった床屋が、ついに黙っていられなくなって、町はずれに掘った穴に向かって「王さまの耳はロバの耳～！！」と思いきり叫んだ、その心境そのままだった。

健の差し入れの飲み物はよく冷えた白ワインで、ひとりで喋りまくってすっかり喉が渴いたペイリーは1500mlのマグナムボトルを一気に半分もあけてしまい、発掘の鬱屈も手伝ってすっかり酔っぱらってしまった。そこでグライダーに載せろと健に詰め寄った。

健は酔っ払いを載せたくないと思ったが、さんざん人工知能付きで初心者でも大丈夫とかなんとか吹聴していたので、しかたなく折れた。まあ、たとえ搭乗者が落下したところで、自動回収機能付きであるし。とはいえ、万が一ということもある。

「ゲロとかやめてくれよ。もし汚したら即刻振り落とすよう、インプットしといたからな」

どうにか飛び立つと、ペイリーは真顔になって言った。「ふん、ひとを酔っぱらい扱いしやがって。俺は素面だって一の！」そして、冒頭の「盗掘者のばかやろー」に繋がるわけである。「言っていることとまずいことの区別くらい、ちゃんとしてらあな。ケンのばーろー」

素面のはずだがろれつは回っていない。

「同じ超古代文明同好会会員といってもケンのやつは経済なんていう超現実的なことやってるし、所帯持ちまうと、やっぱり現実には縛られるからなあ、どうも話が合わなくなってきた。なあ、グライダーよ、俺の本心を聞いてくれるのはおまえだけだ。

マヤ文明は何十年も研究されてるけど、ほんとにわからないことだらけなんだ。

コウ博士³は『古代マヤ文明』の中でいみじくもこう仰せられた。曰く、
『古代マヤの思想についてわかってることはその全体像のほんのわずかな断片にすぎない。マヤの学識と儀礼については数千冊におよぶ書物に記されているはずだが、現在残っているのはわずか四冊だけ⁴である。それはあたかも、われわれのことを知るために後世の人間が、三冊の祈祷書とジョン・バニヤンの『天路歷程』⁵だけを拠り所にするようなものだ』、と。さすがは大先生、おっしゃることに品がある。

いや、これまたおまえにしか言えないことなんだが、マヤ文明破壊の実行犯はコンキスタドールだが、当時は聖職者の方が立場的に強かったはずだ。けっこうな量の文書(もんじょ)が新大陸から持ち出されてるに違いないと俺はにらんでる。文書(もんじょ)はどこへ向かったかって？ そりゃあ、悪名高いヴァチカンの地下保管庫だね。内緒だぜ、くれぐれも。

何千何万年という長ーい周期の彗星が定期的にやってきて、地球上のあらゆるものを、根こそぎ変えてしまう。俺思うんだが、絶滅したのは動物だけじゃない。過去に、古生物と一緒に滅びた文明もある。人間の文明だ。おそらく、マヤはそういう情報も持っていたんだ。自分らもいつか必ず滅びる。だから真剣に空を眺めて観測し、未来を予測しようとしたのさ」

＊

マックス・ペイリーが砂漠の上空で夕日に向かって「ばかやろー」と叫んでいる間、健はひとりで調べ物をしていた。

マヤ暦説明の序盤で、ペイリーはさらっと流してしまったが、気になったことがあった。

『夜の九王』とはなんだ？

³ マイケル・D.コウ（アメリカ合衆国の考古学者、人類学者、碑文研究者）

⁴ ドレスデン、パリ、マドリッド、グロリアの各絵文書。現存する四冊の内容はマヤ北部地域で考古典期に集大成された儀礼、あるいは儀礼と結びついた天文学に限られていた。スペイン人の征服初期の記録によれば、マヤ人の書物には歴史、予言、歌、科学、家系図などが書かれていたという。

⁵ ジョン・バニヤン(1628-1688)著。「クリスチャン」という名の男が破滅の町を出て天国に着くまでの信仰の旅路を寓話の形で描いている。キリスト教文学の最高峰とも言われる。

19・「Long-term calendar」

20・「」へ続く

あとがき

その種の彗星が今また巡ってきているようです…

今回の表紙は

『古代マヤの太陽系』の図が元。Geoff Stray著・『The mayan and other ancient calenders』から。
第十六章で使う予定でしたが、図の出どころが不明だったので本が届くのを待ち、今回のお目見えとなりました。

2025年6月29日 記

奥付

リ・コンストラクション

第十九章 Long-term calendar

2025年 6月30日初版発行

著者

峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材

[イラストAC](#)

制作

Puboo

発行所

デザインエッグ株式会社